

『大乘起信論』(馬鳴菩薩造・真諦三蔵訳)

帰敬偈

尽十方の、最勝業なる徧智と、色無礙自在と、救世の大悲者と、及び彼の身の体と相となる法性真如海(及び)無量の功德蔵と、如実修の行等とに帰命したてまつる。衆生をして、疑を除き、邪執を捨て、大乘の正信を起こして、仏種を断ぜざらしめんと欲するが為の故なり。

発起序

論じて言う。法があつて、マハーヤーナの信根を起こし得る。この故にまさに説かねばならない。説に五分がある。何を五とするのか。一には因縁分、二には立義分、三には解釈分、四には修行信心分、五には勸修利益分である。

第一段 因縁分

最初に因縁分を説こう。問うて言う、どのような因縁でこの論書を造るのかと。

答えて言う、その因縁には八種がある。

一には因縁の総相である。それは、衆生に一切の苦を離れ、究極の安樂を得させたいからであり、世間からの名利と尊敬とを求めためではない。

二には如来の根本の意義を解釈して、諸々の衆生に正しく理解させ、誤解のないようにさせたいからである。

三には善根が成熟している衆生に、マハーヤーナの教法を勧めて不退の信にならせたいからである。

四には善根が微少な衆生に、信心を修習させたいからである。

五には方便を示して、悪業の障りを消滅し、善くその心を護り、痴慢を遠離して、邪網を出させたいからである。

六には止観の修習を示して、凡夫や二乗の人々の心の過失を対処治療したいからである。

七には専念の方便を示して、仏前に生じ、必定して信心を不退転にさせたいからである。

八には利益を示して、修行を勧めたいからである。これらの因縁があつて、この論書を造るのである。

問うて言う。スートラ中にすでにこの法があるのに、どうして重ねて説く必要があるのか。答えて言う。衆生の機根や行為は相違し、受容し理解する因縁も個別だからである。如来在世時には衆生は利根であり、教えを説く人も物心ともに行業に勝れ、完全な音声で一度演説すれば、どの様な者でも等しく理解し、論説の必要もなかった。しかし、如来の滅後は、例えば、自力で広く聞いて理解したり、わずかに聞いても多くを理解する衆生があつたり、自力ではないものの広い論議で理解する衆生もいる。また広い論義を煩雑と感じ、心に留め得る少文で多義を包摂するのを好んで理解できる者もいる。この論書は如来広大の深法の無辺の義を総て包摂するのであつて、まさにこの論を説く必要がある。

第二段 立義分

すでに因縁分を説いたので、次に立義分を説こう。総説するならば、マハーヤーナ(大乘)には二種がある。一には法、二には義である。

第一の法とは衆生心と言う。この衆生心が一切の現象である世間法と真理である出世間法とを包摂するので、この心によってマハーヤーナの意義、衆生心の一心を明かす。つまりは、この心の出世間法である真如相はマハーヤーナの体を示し、この心の世間法である生滅因縁相はマハーヤーナ自身の体・相・用を示し得るからである(心真如門と心生滅門の二門)。

第二の義には、三種がある。一には体大であり、一切法の真如を言う。平等であり増減がない。二には相大であり、如来蔵を言う。無量の性功德を具足する。三つには用大であって、一切の世間と出世間との善の因果を生じ得るからである(体大・相大・用大の三大)。

一切の諸仏が本来から乗じていた法であり、一切の菩薩もみなこの法に乗じて、如来地に到る。

第三段 解釈分

すでに立義分を説いたので、次に解釈分を説こう。解釈分には三種がある。一には正義を顕わし、二には邪執を対処治療し、三つには道に発趣する相を解説する。

正義を顕わすとは、先述のように、一心の法に二種の門があるのを言う。一には心真如門、二には心生滅門である。この二種の門はその各々が一切法を総撰する。なぜなら、この二門は相互が真如門即生滅門として相即しているからである。

心真如門

第一門の心真如とは一法界、大の総相・法門の体である。その心の本性は不生不滅の無自性空である。これは根本正覚中に、「此れ有る時に彼が有る」等とあるのを承け、真理面を示す相依相待性の縁起によっている。一切の諸法はただ妄念によってのみ差別があり、もし心が妄念を離れたならば、一切の境界の差別相はない。一切法は無始以来、言説・名字・心縁の相を離れて完全な平等であり、異変は全くなく、破壊もできない。ただ一心であるので真如と名づける。一切の言説は仮名であり、不実でただ妄念に従うのみで、不可得だからである。真如とは言っても相は全くなく、言説の極みで、言説によって言説を排除するのを言う。しかも、この真如の体は排除すべきものも全くない。一切法は悉くみな「真」だからである。また定義として立てるべきものもない。一切法はみな同じく「如」だからである。まさに、一切の法は説き得ず、念じ得ないから真如と名づけるのみと知らねばならない。

問うて言う、もしそうであれば、諸々の衆生等は、どのように真如に順じ、真如に入ることができるのか。答えて言う、一切法は、もし説いたとしても、能説・所説は全くなく、念じたとしても、能念・所念がないと知ったならば、それを真如に順うと名づけ、もし念を離れたならば、真如への得入と名づける。

また次に、言説によって分別すれば真如には二種の義がある。一には如実空、「空」が完全に実を顕わし得るからである。二には如実不空、「空」には自体があるので「不空」であり、無漏の性功德を具えている。

空とは、本来、「色即是空・空即是色」と示され、一切の染法と相応するから空と言う。空は一切法の差別相を離れ、虚妄の心念がない。まさに、真如の自性は非有相・非無相、非非有相・非非無相、非有無俱相、非一相・非異相、非非一相・非非異相、非一異俱相であると知らねばならない。これに反して、一切の衆生は妄心によって念々に分別するので、一切の染法は空とは相応しない。そこで、真如と現象とを総説して、一切法の相応を説いて「空」とするのである。もし妄心を離れたならば、実には空ずるべきものもない。

「不空」と言うのは、すでに法体は空であって虚妄がないのを顕わし、これは真心である。常恒と不変と浄法とを満足するからであり、「不空」とは名づけるけれども、相の取るべきものは全くない。念を離れた境界はただ証果とのみ相応するのである。

心生滅門

第二門の心生滅とは、如来蔵によるので生滅の心があるのを言う。真如面の不生不滅と現象面の生滅とが相即して不一不異である。これを阿梨耶識と名づける。この阿梨耶識は一切法を包摂し、かつ、一切法を生じ得て、二種の意義がある。一には覚、二には不覚である。

覚とは、心体が念を離れるのを言う。離念の相は虚空界に等しく、遍満しない所がないので法界一相である。これは如来の平等法身であり、この法身により本覚と名づける。本覚の意義は始覚の意義に対して説き、始覚は本覚と相即することによってある。

始覚とは、本覚に縁って不覚があり、不覚に縁って始覚があると説く。また、心の本体を覚るのを究竟覚と名づけ、心の本体を覚らなければ究竟覚ではない。

凡夫人などが煩惱を断じ得ないのは不覚だからである。

二乗の覚智と初発意の菩薩等などは粗分別執著の相を捨てるので相似覚と名づける。

法身の菩薩等などは分別の粗念の相を離れるので随分覚と名づける。

菩薩地を究竟した者などは一念相応して心の初起を覚り、心に初相がなく、微細の念を遠離しているので心性を見ることを得て、心は常住であるので究竟覚と名づける。

したがって、スートラには「もし衆生であって無念を觀じ得る者は、すなわち仏に向う智となす」と説くのである。

また、心の初起には初相の知り得るものは何もないが、それでも、初相を知ると言うのは無念を言うのである。これに反して、一切衆生を覚とは名づけない。衆生は無始以来、念々に相續して、未だかつて念を離れないので無始の無明があると説く。もし無念を得るならば、心相の生・住・異・滅の四相を知る。無念と等しいからである。しかも実際には始覚の異相は全くない。生・住・異・滅の四相は相依相待性の同時であって、みな無自性であり、本来平等の同一覚である。

また次に、本覚が染に随うことで判別すると二種の相が生じる。しかも、何れも本覚と相即しており、離れることはない。一には智淨相、二には不思議業相である。

智淨相と言うのは法力薫習によって如実に修行して方便を満たすからであり、和合識の相を破り相續心の相を滅して、法身を顕現して智が淳淨だからである。それは何故か。一切の心識の相はみな無明ではあるが、無明の相は覚性と不即不離であるから、破られねばならないものでもなく、破られてはならないものでもない。あたかも、大海の水が風によって波動する時、水相と風相とは相互に捨離しないが、水には動性がないので、もし風が止滅するときには、動相は滅するけれども湿性は破壊されない様なものである。これと同様に、衆生の自性清淨心も無明の風によって動く時、心と無明とはともに形相がなくして相互に捨離しないが、心には動性がないので、もし無明が滅するときは、染法の相續は滅するけれども、智性が破られることはない。

不思議業相とは、智が清淨であるので、一切の勝妙の境界、例えば、三嚴二十九種の莊嚴などを作し得るのを言う。無量の功德相は常に断絶せず、衆生の機根に随って自然に相応して、種々に顕現して利益を施与するからである。

また次に、覚の体と相に四種の大の意義がある。虚空と等しく、あたかも淨鏡の様である。

一には如実空鏡。一切の心と境界との相を遠く離れ、法として顕現するものがない。

二には因薫習鏡、如実不空を言う。一切の世間の境界が全て顕われ、不出不入・不失不壊であり、常住一心である。一切の染法は汚染し得ない。智体は不動であって無漏を具え、衆生に薫ずるからである。

三には法出離鏡、不空の法を言う。煩惱礙・智礙を超越して、相即和合の相を離れ、淳・淨・明だからである。

四には縁薫習鏡。法を出離するので遍く衆生の心を照して、善根を修行させて、念に随って示現するからである。

不覚とは、如実に真如の法が一であることを知らずに不覚の心が起こるが、その念がありながらも、念は無自性なので、本覚を離れない相即のことを言う。あたかも迷人が方角によるために迷うけれども、もし方角を離れたならば、迷いが全くない様なものである。衆生もまたそう

である。覺により迷うけれども覺性を離れたならば不覺はない。不覺には妄想心があるので、名義をも知り、それに対する真覺があると説くこともができるが、もし不覺の心を離れたならば、真覺の自相の説くべきものはない。

この不覺において念が生ずるのは生滅門の因縁であり、それは根本正覺中、現象面を示す十二支縁起の流轉門からの展開である。しかも、不覺が本覺と相即すると説くところに真如門をよりどころとする本論の肝要が示されている。

また次に、不覺によって以下の三種の相を生じ、しかもその不覺と相応して離れない。

一には無明業相。不覺によって心が動ずるのを無明業と名づける。覺するときは心が動じない。動ずるときは苦がある。苦果は業因と離れないからである。

二には能見相。心が動ずることで能見がある。動じなければ見はない。

三には境界相。能見によって境界が妄りに現われる。見を離れれば境界はない。

境界の縁によって以下の六種の相が生ずる。

一には智相。境界によって心が起こり、愛と不愛とを分別する。

二には相続相。智によってその苦樂の覺心を生じ、念を起こして相応し相続する。

三には執取相。相続によって境界を縁念し、苦樂を住持して、心は執着を起こす。

四には計名字相。妄執によって、仮の名言の相を分別計度する。

五には起業相。名字によって名を求め、取著して種々の業を起こす。

六には業繫苦相。業によって果を受け、縛られて自在でないからである。まさに、無明は一切の染法を生じ得ると知らねばならない。一切の染法はみな不覺の相である。

また次に、覺と不覺とに二種の相がある。一には同相、二には異相である。

同相と言うのは、たとえば種々の瓦器がみな同じく微塵の性と相である様に、無漏と無明との種々なる業幻も、みな同じく真如の性と相であることを言う。したがって、ストラ中に、この真如の意義により「一切衆生は本来常住であって、涅槃に入っている。菩提の法は修すべき相でもない。作すべき相でもない。畢竟に無得である」と説く。また、色相の見るべきものなどはないが、しかも色相を見ることのあるのは、ただこれは随染業幻の所作であるだけである。これは智に色不空の性があるのではない。智相は見るべきものがないことによるからである。

異相と言うのは、種々なる瓦器が各々不同である様に、無漏と無明との随染幻に差別相があるからである。

また次に、生滅の因縁とは衆生のことを言う。心によって意と意識とを転ずる (pariṇāma) からである。それは、阿梨耶識により無明があると説くからである。不覺によって起こり、能見と能現と境界を取り得ること、念を起こして相続することから意と説くのである。この生滅の因縁は、根本正覺中、現象面を示す十二支縁起の流轉門からの展開である。

この意義にまた五種の名がある。

一には業識。無明の力によって不覺の心が動ずるからである。

二には転識。動心によって能見相があるからである。

三には現識。一切の境界を現わし得る。あたかも、明らかな鏡が色像を現わすようなものであり、現識もまたそうである。五塵に順って対至するので、現われるのに前後はない。一切時に任運にして起こって、常に前に在るから (俱時) である。

四には智識。染淨の法を分別するからである。

五には相続識。念が相続して (pariṇāma) 断絶しないからである。また、過去の無量世等の善惡の業を保持して、消失しないようにさせるからである。また、現在と未来との苦樂等の果報を成熟し得て、業と果報が相応して差違がないからである。さらに、現在では経過した事を忽然として念じさせ、未来の事を不覺に妄慮させるからである。

このことから、三界は虚偽であって唯心の所作である。（三界虚妄但是一心作）心を離れる時には六塵の境界はない。それは何故か。一切法はみなただ心のみから起り、妄念によって生ずるから、一切の分別は自心を分別しているのである。心によって心を見なければ、相であって得られるはずのものもない。まさに、世間の一切の境界は、みな衆生の無明妄心によって住持し得るだけだと知らねばならない。したがって、一切法は鏡中の像に体が得られない様なもので、ただ心だけであって虚妄である。心によって生ずるときは、種々なる法が生じ、心によって滅するときには、種々なる法が滅する。

また次に、意識とは、この第五の相続識を言う。諸々の凡夫においては取著がさらに深く、我と我所とを計度し、種々に妄執し、事に随って攀縁し、六塵を分別することによって、意識と名づける。また、分離識とも名づけ、分別事識とも名づける。この識は見と愛との煩惱によって増長するからである。

無明の薫習によって生起する識は、凡夫の知り得るものではない。また、二乗の智慧の覚了する所でもない。謂わば、菩薩が知り得るけれども、初めの正信より発心して観察し、もし法身を証得すれば、少分を知ることができる。さらに、菩薩の究竟地までも知り尽くし得ないので、ただ仏のみが全うするのである。何故ならば、この心は無始以来、自性清浄ではあるけれども、しかも無明がある。無明によって汚染された染心がある。染心があるといっても、この心は常恒で不変である。したがって、このことは唯だ仏のみが知り得る。

言う所の心性は常に無念であるので不変と名づける。それに対して、一法界に達しないことから、心に相応せずして、忽然として念が起るのを無明と名づける。

修行の階梯である地において遠離する染心には、順次に以下の六種がある。

一には執相応染。二乗の解脱と及び信相応地とにおいて遠く離れる。

二には不断相応染。信相応地から浄心地に到ることで究竟して遠く離れる。

三には分別智相応染。具戒地から無相方便地に到ることで究竟して遠く離れる。

四には現色不相応染。色自在地において遠く離れる。

五には能見心不相応染。心自在地において遠く離れる。

六には根本業不相応染。菩薩尽地から如来地に到って遠く離れる。

先に「一法界に達せず」と言ったのは、信相応地より観察し、学び断じて浄心地に入り、分に随って念を離れることを得て、さらに如来地ではじめて完全に念を離れ得るからである。相応せずと言うのは、心法と念法とが異なるのを言う。染と浄との差別はあるが、知相と縁相とは本来は同一で相応する。しかし、不相応とは心についての不覚を言う。本来は常に相即して別異はないにもかかわらず、不覚では知相と縁相が相即せず同一ではない。また、染心という意義は煩惱礙と名づける。真如根本智を障げ得るからである。無明という意義は、智礙と名づける。世間の自然業智を障げ得るからである。これは何故か。染心によって能見と能現とがあって、妄りに境界を取り、平等性に相違するからである。一切の法は常に寂静であって起相は全くないが、無明不覚が妄りに法と相違する。世間一切の境界に順じて種々に知ることができないからである。

また次に、生滅相を分別すれば二種がある。一には粗であり、染心と相応する。二には細であり、染心とは相応しない。また、粗中の粗は凡夫の境界、粗中の細と及び細中の粗とは菩薩の境界、そして細中の細は仏の境界である。

この二種の生滅相は、無明の薫習によっている。所謂、因によるのと縁によるのとである。因によるとは、不覚だからである。縁によるとは、妄りに境界を作るからである。もし因が滅するときには、すなわち縁は滅する。因が滅するので不相応の心相が滅し、縁が滅することで相応の心相も滅する。

問うて言う、もし心が滅すれば、どうして相続するのか。もし相続するのならば、どうして

完全に滅すと説くのか。答えて言う、言う所の滅とは、ただ心相のみの滅であって、心体の滅ではない。例えば、風は水によって動相もあるが、もし水が滅すれば、依止する所がなくて風相も断絶する。水が滅しなければ風相は相続する。しかし、風が滅すれば、水の動相は風に随って滅するけれども、水が滅するのではない。その様に、無明もまた同じである。心体によって動ずるが、もし心体が滅したときは、断絶して衆生が依止する所はないが、心体は滅しないので、心は相続することを得る。ただ癡のみが滅するので、心相はそれに従って滅するが、心智が滅するのではない。

真如薫習・妄心薫習

また次に、四種の法に薫習することで染法と浄法とが起こって断絶しない。一には浄法であって、真如と名づける。二には一切の染因であって、無明と名づける。三には妄心であって、業識と名づける。四には妄境界であって、所謂、六塵である。

薫習とは、世間の衣服には実には香気がないが、もし人が香料によって薫習するときには、それによる香気がある様に、真如浄法にも実には染はないが、ただ無明によって薫習するときには、それによる相がある。無明浄法にも実には浄業はないが、ただ真如によって薫習するときには、それによる浄用があるのを言う。

どうして薫習は染法を起こして断絶しないのか。所謂、真如の法によっているので無明がある。無明という染法の因があるので、真如に薫習する。薫習することで妄心がある。妄心によって無明に薫習する。真如の法に達しないので不覚の念が起こって、妄境界を現ずる。妄境界という染法の縁があるので、妄心に薫習し、それに念著して、種々の業を造って一切の身心等の苦を受けさせるのである。この無明から順次に各支が生起して老死に到る過程は十二支縁起の流転門からの継承でありつつも、真如門との相即を重要な展開としている。この妄境界の薫習に二種がある。一には増長念薫習、不覚の念による増長。二には増長取薫習、念からの執着による増長である。妄心が薫習するのにも二種がある。一には業識根本薫習。阿羅漢と辟支仏と一切の菩薩に生滅の苦を受けさせ得るからである。二には増長分別事識薫習。凡夫に業繫の苦を受けさせる得るからである。無明が薫習するのにも二種がある。一つには根本薫習。業識を成就し得るからである。二には所起見愛薫習。分別事識を成就し得るからである。

どうして薫習は浄法を起こして断絶しないのか。それは、真如法があるからである。無明に薫習し得て、薫習の因と縁の力によって妄心に生死の苦を厭い、涅槃を樂求させる。この妄心に厭離と欣求との因と縁があるので、真如に薫習するのである。自ら己れの性を信じ、心が妄りに動ずるだけであって前の境界はないと知って、遠離の法を修するときは、如実に前の境界はないと知るので、種々の方便によって随順行を起こし、取らず、念ぜず、さらに久遠に薫習する力によるので、無明は滅する。無明が滅することで、心が起こることも全くなく、心が起こることがないから、境界は染心に従って滅する。因と縁とが俱に滅するので、心相がみな尽きるのを、涅槃を得て、自然の業を成ずると名づけるのである。この無明の滅から逆次に涅槃を得る過程は十二支縁起の還滅門からの継承でありつつも、真如門との相即を重要な展開としている。

妄心薫習について二種がある。一には分別事識薫習。諸々の凡夫と二乘人等が生死の苦を厭うことで、力の及ぶ所に随って、漸々に無上道に趣向するからである。二には意薫習。諸々の菩薩が発心し勇猛であって、速やかに涅槃に趣くからである。

真如薫習にも二種がある。一つには自体相薫習であり、二には用薫習である。

自体相薫習とは、無始以来、無漏法を具えることと、不思議業を具備して、境界の性と作ることである。この二義によって恒常に薫習し、力用があることで、衆生に生死の苦を厭い、涅槃を樂求し、自ら己身に真如法があると信じて、発心し修行させ得ることを言う。

問うて言う、もしこの様であるならば、一切衆生に悉く真如があつて、等しくみな薫習するはずであろうのに、どうして有信と無信と無量に前後して差別するのか。みなまさに、一時に自らに真如法があると知り、勤修し方便し、等しく涅槃に入るはずであろう。答えて言う、真如は本より一ではあるけれども、無量無辺の無明があつて、無始已来、自性差別し、厚薄も同じではないからで、過恒沙等の上煩惱も無明によって起こつて差別し、我見愛染煩惱も無明により起こつて差別する。この様に、一切の煩惱が無明によって起こされ、前後して無量に差別することは、ただ如来のみが知り得ることだからである。また、諸仏の法には、因もあり縁もあれば、因と縁とによって具足したならば、成就することを得る。木中の火性は火の正因ではあるが、もし人が知ることなくて、方便によらなければ、自ら木を焼き得るであろうこともあり得ない様に、衆生もまた同様である。正因の薫習する力があるとしても、もし諸仏・菩薩・善知識等に値遇し、これによって縁となさなかつたならば、自ら煩惱を断じて涅槃に入り得るであろうこともあり得ない。もしくは外縁の力があつたとしても、内の浄法が未だ薫習する力がなかつたならば、また完全に生死の苦を厭い、涅槃を樂求することもあり得ないであろう。もしくは因と縁とによって具足したならば、自には薫習の力があつて、また、諸仏と菩薩等の慈悲によって願護されているから、苦を厭う心を起こし、涅槃があるの信じ、善根を修習することができるであろう。善根修習を成熟することにより、諸仏と菩薩との示教に値遇し、利喜し、進んで涅槃の道に趣向することを得るはずである。

用薫習とは衆生への外縁の力である。この様な外縁には無量の意義があるが、略説すれば二種である。一には差別の縁、二には平等の縁である。

差別の縁とは、ある人が初發意で始めて道を求める時から仏果を得るまで、中途において、見て念ずれば、諸仏や菩薩たちは、眷属父母諸親、給使、知友、怨家となり、四摂を起こし、一切の所作と無量の行縁により、大悲の薫習する力を起こすことで、衆生に善根を増長するを得て、見聞して利益を得させるからである。この縁に二種がある。一には近縁。速やかに済度を得るからである。二には遠縁。久遠に済度を得るからである。

平等縁とは、一切の諸仏と菩薩は、みな一切の衆生を度脱させようと願つて、自然に薫習して、恒常に捨てない。仏凡同体という智の力によるので、まさに見聞するであろうことに従つて作業を現わすのを言う。衆生は三昧によって平等に諸仏を見ることを得るからである。

この自体相と用の薫習を分別すれば、また、二種がある。一には未相応。凡夫と二乗と初發意の菩薩等は意と意識とが薫習する信の力によるので、修行し得るけれども、未だ無分別心が体と相応し得ないのと、未だ自在業の修行は用と相応し得ないのを言う。二には已相応。法身の菩薩は無分別心を得て諸仏の智と用とに相応し、ただ、法の力によるのみであつて、自然に修行し真如に薫習して無明を滅することを言う。

また次に、染法は無始已来、薫習して断じないが、仏果を得た後に断がある。浄法薫習は断が全くなく、未来際を尽す。これは何故か。真如法は常に薫習するからである。妄心が滅すれば法身が顕現し、用薫習を起こすので、断は全くない。

また次に、真如の自体相は一切の凡夫・縁覺・菩薩・諸仏とにおいて増減が全くない。前際に生ずるのでもなく、後際に滅するのでもない。全くの常恒である。

無始以来、性には自ら一切の功德を満足する。自体に大智慧光明の意義があるからである。遍照の法界であり、真実の識知だからである。自性清浄心であり、常樂我淨だからである。清涼不變自在だからである。この様に恒沙に超過している不離不断不異不思議の仏法を具足し、さらに満足し、欠ける所が全くないので如来蔵と名づける。また、如来の法身とも名づける。

問うて言う、先には、真如はその体は平等であつて、一切の相を離れていると説いていたのに、どうしてまた、体にこの様な種々の功德があると説くのか。

答えて言う、実にこの諸々の功德があるといつても、差別の相はなく、等同一味であつて唯

一真如である。無分別であって、分別の相を離れていることによって、無二だからである。また、差別があると説くのは、業識の生滅相によって示すのである。一切の法は、無始以来、ただ心のみであって実には念はない。しかし妄心があつて、不覚において念を起こして、諸々の境界を見るので無明とは説くけれども、それは心性から起こるのではない。平等は大智慧光明によるのである。もし心が見を妄りに起こせば、不見の妄相があるけれども、心性として見を離れるときは、遍照法界にある。もし心が動ずれば、真の識知ではない。心自性が全くなければ、常楽我浄ではなく、熱惱衰変し、自在ではない。さらに、具に過恒沙等の妄染がある。これに対し、心自性として動じないときは、過恒沙等の浄功德の相が顕れるけれども、もし心に妄念が起こり、前法を可念として見るときは、心自性に欠ける所があるからである。この様にして浄法の無量の功德は一心であり、所念は全くない。満足しているのを法身如来の蔵と名づける。

また次に、真如の用とは、諸仏如来は本の因位地において大慈悲を発し、諸々の波羅蜜を修して衆生を摂化し、大誓願を立て、悉く等しく衆生界を度脱しようとして欲し、また劫数をも制限することなく未来を尽す。一切衆生を攝取することは己身の様であり、しかも、衆生という相さえも取らない。如実に一切衆生と己身とは真如平等であつて別異なしと知るからである。この様な大方便智があるので、無明を除滅して本の法身を見て、自然に不思議の業と種々の用がある。真如と等しく一切処に遍満するが、また用相の得られるものは全くない。諸仏如来は、ただ法身・智相の身である。第一義諦であるのみで、世諦の境界は全くない。施作を離れ、ただ、衆生の見聞に随つて、益を得るので説いて用となすだけである。

この用に二種がある。一には分別事識によるもので、凡夫と二乗の心が見る所であつて、応身と名づける。応身が転識より現われることを知らないのので、外より来たものと見て、色の分齊を取つて、悉くは知ることができない。

二には業識によるもので、諸々の菩薩の初発意より菩薩の究竟地までの心が見る所を言い、報身と名づける。身に無量の色があり、色に無量の相があり、相に無量の好があり、住する所の依果にもまた無量、種々の莊嚴がある。示現する所に随つて辺際は全くなく、窮尽することはできない。分齊の相を離れ、その所応に随つて常に住持し得て、毀損せず失われない。この様な功德はみな諸々の波羅蜜等の無漏の行薫と不思議薫との成就する所によっており、無量の樂相を具足するので、報身と説く。

また、凡夫が見る仏身は粗色のみである。六道に従つて各々が見る仏身は同じではなく、種々の異類がある。受樂の相ではないのので、応身と説く。

また次に、初発意の菩薩等が見る仏身は、深く真如の法を信ずるので、少分を見るにも関わらず、その色相と莊嚴等の事は来もなく去もなく、分齊を離れ、唯心によつてのみ現われ、真如を離れずと知る。しかし、この菩薩もなお自ら分別する。未だ法身の位に入らないからである。もし浄心地を得るときは、見る所は微妙であつて、その用もうたた勝れている。さらに菩薩地が尽きたならば、これを見ることも極まる。もし業識を離れたならば、見相もない。諸仏の法身は、彼此の色相の互いに相い顕れることさえも全くないからである。

問うて言う、もし諸仏の法身は色相を離れると言うならば、どうして色相を現わすことができるのか。答えて言う。この法身は色の体であることから色を現じ得るのである。無始より已来、色心不二である。色性即智によるので、色の体が無形であるのを智身と名づくと説く。智性即色によるので、法身は一切処に遍満すると名づくと説く。現われた色には分齊が全くないけれども、心に従つて十方世界の無量の菩薩と無量の報身と無量の莊嚴とを示し得て、各々が差別して、みな分齊がない。しかも、相互に妨げない。これは心識の分別が知り得るところではない。真如の自在の用の意義だからである。

生滅門から真如門へ

また次に、生滅門より真如門に入ることを明かそう。五陰を推求すると、色と心とのみであって、六塵の境界は畢竟じて無念である。心に形相がないので、十方にこれを求めても、終いに得られない。人が迷うので、東を西と言ったりもするが、方角は実には転ずることがない様に、衆生もまたそうである。無明の迷いによるので、心を言っただけでは念とはするけれども、心は実には動かないので、もし観察し得て、心は無念であると知ったならば随順して真如門に入ることを得るのである。この過程は、十二支縁起の還滅門からの展開であり、しかも真如門との相即に依っている。

邪執を対処治療するとは、一切の邪執はみな我見によっており、もし我を離れたならば邪執もなくなる。この我見に二種がある。一には人我見、二には法我見である。

人我見とは、(本論では一般論とは異なり、法身・如来蔵に対する邪見を指し、) 諸々の凡夫について説く。五種がある。

一にはスートラに、「如来の法身は畢竟じて寂寞であることは、虚空の様である」と説くのを聞いて、執着を破するためであることを知らないで、虚空が如来の性であると言っている。どのように対処治療するのか。虚空の相は妄法であり、体は無であり実ではない。色に対するので有であり、可見の相であって、心を生滅させる。それに対し、一切の色法は本来は心であるので、実には外の色はない。もし色がないならば、虚空の相もないと示して対処治療する。一切の境界はただ心のみが妄りに起こるので有ではあるが、もし心が妄動を離れば、一切の境界は滅する。唯一の真心は、遍満しない所はない。これを如来の廣大性智の究竟の意義と言う。虚空の相の様ではないからである。

二にはスートラに、「世間の諸法は畢竟じて体は空である。さらに涅槃真如の法もまた、畢竟じて空であり、本より已来、自ら空であって一切の相を離れている」と説くのを聞いて、執着を破するためであることを知らないで、真如涅槃の性はただ空のみであると言っている。どのように対処治療するのか。真如法身はそれ自体が不空であって、無量の性功德を具足すると示して対処治療とする。

三にはスートラに、「如来の蔵は増減することが全くない。体に一切の功德の法を備える」と説くのを聞いて、理解しないことから、如来蔵に色心の法の自相差別があると言っている。どのように対処治療するのか。ただ真如の意義によってのみ説くからであるのと、生滅の染の意義によって示現しているのを差別と説くからであると示すことで対処治療とする。

四にはスートラに、「一切世間の生死の染法は、みな如来蔵によってあり、しかも有であるので、一切諸法は真如を離れない」と説くのを聞いて、理解せずして、如来蔵の自体に一切世間の生死等の法を具有すると言っている。どのように対処治療するのか。如来蔵には、無始已来、ただ過恒沙等の諸々の浄功德の真如に離れず断ぜず異ならざるの意義であることを示して対処治療とする。過恒沙等の煩惱の染法はただ妄有のみであり、性自ら本より無である。無始世以来、未だかつて如来蔵と相応しないことによるからである。もし如来蔵の体に妄法があつて、証会して、永に妄を息めさせようとするならば、それは全くあり得ないからである。

五にはスートラに、「如来蔵によるがために生死がある。如来蔵によるがために涅槃を得」と説くのを聞いて、理解せずして、衆生に始があると云い、始を見ることによるので、また如来が得た所の涅槃にも、その終止することがあつて、還つて衆生と作ると言っている。どのように対処治療しようとするのか。如来蔵には前際がなく、無明の相もまた始も全くなく、もし、「三界の外にさらに衆生があつて始めて起こる」と説くならば、これは外道の経の説である。また如来蔵には後際も全くないので、諸仏が得た所の涅槃もこれと相応して後際が無いことから、それを示して対処治療とする。

法我見とは、二乗の鈍根による邪執である。如来がただ人無我のみを説いて、究竟して法無

我を説かなかつたことから、五陰生滅の法があると見て、生死を怖畏し、妄りに涅槃を取るのである。どのように対処治療するのか。五陰の法は自性不生であるので、滅も全くなく、本来涅槃であることを示して対処治療とする。

また次に、究竟して妄執を離れるには、まさに、染法と浄法とはみな悉く相依相待であり、自相の説くべきものは全くないと知らねばならない。一切の法は無始以来、非色・非智・非識・非有・非無であり、終には不可説の相である。しかしながらも言説があるのは、まさに如来の善巧方便であつて、仮に言説によって衆生を引導するのみであると知らねばならない。その旨趣は、全て念を離れて真如に帰入させるためである。一切法を念ずれば、心を生滅させて実智に入るを妨げるからである。

道に発趣する相を分別するとは、一切諸仏の証りへの道に一切の菩薩が発心し修行し、趣向するのを言うのである。略して発心を説くならば、三種がある。一には信成就発心、二には解行発心、三には証発心である。

信成就心とは、どのような人により、どのような行を修し、信の成就を得て、発心するに値し得るのか。それは不定聚の衆生によるのである。薫習と善業力とがあるので、業の果報を信じ、十善を起し得て生死の苦を厭い、無上の菩提を欲求し、諸仏に値遇することを得て、親承供養し、信心を修行する。一万劫を経て、信心を成就するからである。諸仏と菩薩とが教えて発心させ、あるいは大悲によるので自ら発心するを得て、あるいは正法が滅しようとするにちなみ、護法の因縁によって、自ら発心するを得る。この様に信心成就して発心を得た者は、正定聚に入って、終に退転することがないので、如来種の中に住して、正因と相応すると名づける。

もし衆生が善根が微少であり、久遠より以来、煩惱が深厚であれば、仏に値遇して供養することを得たとしても、人天の種子、あるいは二乗の種子を起す。たとえ大乘を求める者がいたとしても、根は不定であり、もしくは進み、もしくは退く。あるいは諸仏を供養することがあるならば、未だ一万劫を経なくとも、中において縁に遇って、また発心することがある。仏の色相を見て、あるいは衆僧を供養することによって、あるいは二乗の人の教令によって、あるいは他に学んで発心する。この様なものたちの発心は全てみな不定である。悪因縁に遇うときには、あるいは退失し、二乗地に墮するからである。

また次に、信成就発心とは、どのような心を発すのか。略して三種がある。一には直心である。正しく真如の法を念ずるからである。二には深心である。樂って一切の諸善行を集めるからである。三には大悲心である。一切衆生の苦を抜こうと欲するからである。

問うて言う、上述の法界は一相であつて仏体は無二であると説いてきたのに、どうして、ただ真如を念ずるだけではなく、諸善の行を求学することを許すのか。答えて言う、譬えば大摩尼宝の体性は明浄ではあつても鉍穢の垢があれば、もし人が宝の性があると念じたとしても、方便をもって種々に磨治しなければ、終に浄なることを得られない様に、衆生の真如の法も、体性は空浄ではあつても、無量の煩惱の染垢があれば、もし人が、真如を念じたとしても、方便をもって種々に薫修しなければ、また浄なることを得られない。垢は無量にして一切法に遍満するからである。一切の善行を修して対処治療とするのである。もし人が、一切の善法を修行すれば自然に真如の法に帰順する。

略して方便を説くと四種がある。

一には行の根本の方便である。一切法の自性は無生であると観じて妄見を離れ、生死にも住せず、一切法は因縁和合して業果は失せないと観じて大悲を起し、諸の福德を修し、衆生を摂化して、涅槃にも住しないの言う。法性の無住処に順ずるからである。

二には能止の方便である。慚愧し悔過し、一切の悪法を止め得て、増長させないの言う。法性の諸過を離れるのに順ずるからである。

三には善根を發起して増長する方便である。勤めて三宝を供養礼拝し、諸仏を讃嘆・随喜・勧請するの言う。三宝を愛敬する淳厚心によって信が増長することを得て、無上の道を志求し得るのである。また、仏法僧の力に護られることで業障を消し得て、善根は退転しない。法性の癡障を離れることに順ずるからである。

四には大願平等方便である。発願して、未来を尽して一切衆生を化度するのに余り有ることをなさせて、みな無余依涅槃を究竟させる。法性の断絶がないのに順ずるからである。法性は広大であって一切衆生に遍満し、平等無二であって、彼此を念じず、究竟して寂滅だからである。

菩薩はこの心を発すので、少分にも法身を見ることを得る。法身を見るので、その願力に従って八種に衆生利益を現わし得る。所謂、八相化儀で、兜率天より退出すると、入胎と、住胎と、出胎と、出家するのと、成道するのと、法輪を転ずると、涅槃に入るとである。しかし、この菩薩を未だ法身とは名づけない。その過去無量世来の有漏の業を未だ決断し得ないからである。その生ずる所に従って微苦と相応するが、業繫とはならない。大願自在力があるからである。スートラの中に、「悪趣に退墮する者あり」と説く様なものは、それは実は退すのではなく、ただ初学の菩薩の未だ正位に入らずして、懈怠する者を恐怖させて、勇猛ならせるためである。またこの菩薩は一たび発心して後には、怯弱を遠離しているのに、終には二乗地に墮することをも畏れない。もし無量無辺阿僧祇劫に勤苦難行して、涅槃を得るであろうと聞いても、また怯弱にはならない。一切の法は無始已来、自ら涅槃であると信知しているからである。

解行発心とは、まさに、さらに勝れていると知らねばならない。この菩薩は初の正信より以来、第一の阿僧祇劫において満足しようとするので、真如法の中において深解現前し、修する所は相を離れている。法性の体には慳貪はないと知るので、随順して布施波羅蜜を修行する。法性には染はなく、五欲の過を離れていると知るので、随順して持戒波羅蜜を修行する。法性には苦はなく、瞋悩を離れていると知るので、随順して忍辱波羅蜜を修行する。法性には身心の相がなく、懈怠を離れていると知るので、随順して精進波羅蜜を修行する。法性は常住であり、体に乱はないと知るので、随順して禅定波羅蜜を修行する。法性は体は明であり、無明を離れると知るので、随順して智慧波羅蜜を修行する。

証発心とは、浄心地より菩薩究竟地までである。どのような境界を証得するのか。所謂、真如である。転識によるので、境界とは説いているけれども、しかもこの証果においては境界は全くない。ただ真如智のみであるので、法身と名づける。

この菩薩は一念の頃に十方無余の世界に至り、諸仏を供養し、転法輪を勧請し得るのは、ただ衆生を開導し、利益するためのみであって、文字によらず、あるいは地を超えて速やかに正覚を成ずると示すのは、怯弱の衆生のためである。あるいは「私は無量阿僧祇劫において、まさに仏道を成すであろう」と説くのは、傲慢の衆生のためである。この様な無数の方便を示し得ることは不可思議である。しかも実は菩薩の種性・発心・証果はみな等しくて、超過の法は全くない。一切の菩薩はみな三阿僧祇劫を経るからである。ただし、衆生の世界は同じではなく、所見と所聞と根・欲・性とが異なるのに従うので、所行を示すことにもまた差別がある。

また、この菩薩の発心の相には、三種の心の微細の相がある。一には真心、無分別であるからであり。二には方便心、自然にあまねく衆生を利益するからであり。三には業識心、微細に起滅するからである。

また、この菩薩は功德を成就するときに、色究竟処において、一切世間の最大の仏身を示現する。一念相応の智慧をもって、無明が頓に尽きるのを一切種智と名づけ、自然にして、しかも不思議の業があつて、十方に現じて衆生を利益し得ることを言う。

問うて言う、虚空無辺であるから世界無辺であり、世界無辺であるから衆生無辺である。衆

生無辺であるから、心行の差別もまた無辺である。この様に境界は分齊することができない。知ることは難く、解することは難い。もし無明を断じたならば、心想も全くないのに、どうして達し得ることを一切種智と名づけるのか。答えて言う、一切の境界は本来一心であって想念を離れている。衆生は妄りに境界を見るので、心に分齊がある。妄りに想念をおこして法性にかなわないので、決了することはできないが、諸仏如来は見と想とを離れているので、遍満しない所はない。心は真実であるので、これは諸法の性である。自体は顕れて一切の妄法を照らし、大智用は無量の方があって、諸々の衆生がまさに理解し得るであろう所に従って、みな種々の法義を開示し得る。したがって、一切種智と名づけることができる。

また問うて言う、もし諸仏に自然の業があつて、一切処に示現して、衆生を利益し得るならば、一切衆生はあるいは仏身を見、あるいは神変を見、あるいはその説を聞いて、利益を得ないことはないであろう。どうして世間は多く、見ることができないのか。答えて言う、諸仏如来の法身は平等であつて一切処に遍満し、作意は全くないので自然と説くけれども、ただ衆生の心によってのみ示現する。衆生の心はちょうど鏡の様である。鏡にもし垢があれば、色像は現れない。この様に、衆生の心もし垢があれば、法身は示現しないからである。

略して信心を説くと四種がある。一には根本を信ずる。真如の法を樂念するからである。二には仏に無量の功德があると信ずる。常に念じて親近し、供養し、恭敬して、善根を發起し、一切智を願求するからである。三には法に大利益があると信ずる。常に念じて諸の波羅蜜を修行するからである。四には僧は正しく自利と利他とを修行し得ると信ずる。常に樂つて諸々の菩薩衆に親近し、如実の行を求学するからである。

修行に五門があつて、この信を成就できる。一には施門、二には戒門、三には忍門、四には進門、五には止觀門である。

どのように施門を修行するのか。もし一切の來たつて求索する者を見れば、あらゆる所の財物を力に従つて施与する。自ら慳貪を捨てることで、彼を歡喜させる。もし厄難・恐怖・危逼を見れば、己の力が及ぶところに従つて無畏を施与する。もし衆生が來たつて法を求める者があるならば、己の解し得るのに従つて方便してそのために説く。名利と恭敬とを貪欲してはならない。ただ自利と利他とを念じて菩提に廻向するからである。

どのように戒門を修行するのか。殺さず、盜まず、姪せず、兩舌・惡口・妄言・綺語をしない。貪嫉・欺詐・詔曲・瞋恚・邪見から遠離する。もし出家者ならば煩惱を折伏しようとするので、喧騒を遠離し常に寂靜に処して、少欲・知足・頭陀等の行を修習し、さらに小罪にも心に怖畏を生じて、慚愧、改悔して、如来所制の禁戒を輕んじてはならない。まさに譏嫌を護つて、衆生に妄りに過罪を起こさせてはならないからである。

どのように忍門を修行するのか。まさに他人が悩ますのを忍んで、心に報復を懷いてはならない。またまさに利と衰と毀と譽と譏と苦と樂等の法を忍ばねばならない。

どのように進門を修行するのか。諸々の善事において心は懈退しない。志を立てて堅強であり、怯弱を遠離し、まさに過去久遠より以來、虚しく一切の身心の大苦を受けて、利益が全くないのを念じなければならない。この故に、まさに勤めて諸の功德を修め、自利利他して速やかに衆苦を離れねばならない。

また次に、もし人が信心を修行するけれども、先世以來の重罪、惡業の障礙によって、魔と邪と諸鬼のために悩亂され、あるいは世間の事務に種々に惑わされ、あるいは病苦のために悩まされる。これらの様な衆多の障礙があるけれども、まさに勇猛精勤して、昼夜六時に諸仏を礼拝し、誠心に懺悔し、勸請し、隨喜し、菩提に廻向せねばならない。常に休廢しなければ、諸障を免れるを得て善根が増長するからである。

止観門の修習

どのように止観門を修行するのか。止とは、一切の境界の相を止めるのを言う。シャマタ観に随順するからである。言う所の観とは、因縁生滅の相を分別するのを言う。ヴィパッサナー観に随順するからである。どのように随順するのか。この二義は漸々に修習すれば、相互に捨離することなく、並んで現前するからである。

もし止を修する者は、静処に住し、端座して意を正し、氣息にもよらず、形色にもよらず、空にもよらず、地水火風にもよらず、さらに、見聞覚知にもよらない。一切の諸想を念に随ってみな除き、また除想をも遣る。一切の法は本来無相であって、念々に生ぜず、念々に滅しないからである。心外に随って境界を念ずれば、心をもって心を除くことはできない。心がもし馳散したならば、まさに摂め来って、正念に住させねばならない。この正念とは、まさに、唯心にして外の境界がないのを言うこと知らねばならない。またこの心もまた自相がなく、念々に不可得だからである。もし坐より立って、去来進止に施作する所があっても、一切時において常に方便を念じ、随順して観察しなければならない。久しく習修し淳熟すれば、その心が住することを得るであろう。心が住することにより、漸々に猛利にして、随順して真如三昧に入ることを得、深く煩惱を伏し、信心は増長し、速やかに不退を成すであろう。ただ疑惑と不信と誹謗と重罪業障と我慢と懈怠とを除く。これらの様な人は止に入ることができない。

また次に、この様な三昧によって法界は一相であると知る。一切の諸仏の法身と衆生身とは平等であって無二である。これを一行三昧と名づける。まさに、真如は三昧の根本であると知らねばならない。もし人が修行すれば、漸々に無量の三昧を生じ得るからである。

あるいは衆生に善根力がないときには、諸魔・外道・鬼神によって惑乱される。坐中において形を現して恐怖せしめ、あるいは端正な男女等の相を示現する。まさに唯心であることを念じなければならない。境界は滅して終には悩まされない。あるいは天人の像、菩薩の像を示現し、また如来の像を化作して相好を具足し、もしくは陀羅尼を説き、もしくは布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧を説き、あるいは平等・空・無相・無願・無怨・無親・無因・無果・畢竟空寂であるのが真の涅槃であると説く。あるいは人に宿命の過去の事、また、未来の事を知らせ、他心智を得て、弁才無礙にならせる。衆生に世間の名利の事に貪著させ得て、また、人に数々瞋り、数々喜んで、性に常準がないようにならせ、あるいは多く慈愛し、多睡、多病であって、その心を懈怠にならせる。あるいは急に精進を起こさせ、後に休廢し不信を生じて多疑多慮ならせ、あるいは本の勝行を捨てて雑業を修させ、もしくは世事に執着して種々に牽纏させ、また人に諸々の三昧の少分相似を得させることができる。これらはみな外道の得る所であり、真の三昧ではない。あるいはまた人に、あるいは一日、あるいは二日、あるいは三日、乃至、七日、定中に住して、自然に香美な飲食を得、身心に適悦し、飢えず、渴かないようにさせて、人に愛著させる。あるいは、人に食に際限なく、たちまちに多く、たちまちに少なくして、顔色に変異をもたらす。したがって、行者は常にまさに智慧をもって観察し、この心が邪網に墮してはならない。まさに勤めて正念であって、取らず著しないときには、この諸々の業障を遠離し得るであろう。

まさに、外道のあらゆる三昧はみな、見愛我慢の心を離れないと知らねばならない。世間の名利と恭敬とに貪著するからである。真如三昧は見相にも得相にも住しない、さらに定を出でてまた懈怠がなければ、あらゆる煩惱は漸々に微薄となる。もし諸々の凡夫であってこの三昧法を習わずして、如来の種性に入るなどは決してあり得ない。世間の諸禪三昧を修すれば、多く味著を起こし、我見により三界に繫属し、外道と同じである。もし善知識の所護を離れたならば、外道の見を起こすからである。

また次に、精勤して専心にこの三昧を修学する者は、現世にまさに十種の利益を得るであろう。

一には常に十方の諸仏と菩薩によって護念される。
二には諸魔と悪鬼とのために恐怖せしめられないことを得る。
三には九十五種外道と鬼神とによって惑乱されない。
四には甚深の法を誹謗することを遠離し、重罪業障も漸々に微薄となる。
五には一切の疑と諸の悪覺觀とを滅す。
六には如来の境界において信が増長することを得る。
七には憂悔を遠離し、生死の中において勇猛にして怯とならない。
八にはその心は柔和であって、驕慢を捨てて他人の為に悩まされない。
九には未だ定を得ずとも、一切の時と境界処とにおいて煩惱を減損し得て世間を楽わない。
十にはもし三昧を得たならば、外縁の一切の音声によって驚動させられない。
また次に、もし人が、ただ止のみを修するならば、心は沈没し、あるいは懈怠を起し、衆善を楽わずして、大悲を遠離するであろう。したがって、觀を修する。

觀を修習する者は、まさに一切世間の有為の法は久しく停まることを得ず、須臾に変壞し、一切の心行は念々に生滅し、これをもって苦であると觀ぜねばならない。まさに過去に念じていた所の諸法は慌忽として夢の様であると觀ぜねばならない。まさに現在念ずる所の諸法はちょうど電光の様であると觀ぜねばならない。まさに未来に念ずる所はちょうど雲の忽爾として起こる様であると觀ぜねばならない。まさに世間一切の有身は、悉くみな不淨であって種々の汚穢があり、一として樂うべきものはないと觀ぜねばならない。

この様にまさに、一切衆生は無始已来、みな無明によって薰習されているので、心を生滅させて、已に一切の身心の大苦を受ける。現在に無量の逼迫がある。未来の所苦もまた際限がない。捨離することも難しいけれども、しかも覺知しない衆生はこの様に甚だ愍むべきと念じなければならない。

この思惟をなして、すなわち勇猛にして大誓願を立てる。「願わくば我が心を、分別を離れさせることのために、十方に遍滿して一切の諸善功德を修行し、その未来を尽して無量の方便によって一切の苦悩の衆生を救拔し、涅槃第一義の樂を得させよう」と。

この様な願を起すので、一切の時と処とにおいて、あらゆる衆善を、己れの力の及ぶに従って、捨てずして修学し、心に懈怠はない。ただ坐する時に止に専念するのを除いて、もしくは余の一切には、悉くまさに応作と不応作とを觀察せねばならない。

行・住・臥・起の何れにせよ、みなまさに止觀俱行であらねばならない。所謂、諸法の自性は不生であると念ずるけれども、しかもまた因縁和合の善悪業と苦樂等の報とは失われず、壞せずと念ずるのである。因縁と善悪業と報とを念ずるとはいつでも、しかもまた性は不可得であると念ずる。もし止を修すれば、凡夫の世間に住著するを対処治療し、二乗の怯弱の見を捨棄し得る。もし觀を修すれば、二乗の大悲を起こさない狭劣な心の過を対処治療して、凡夫の善根を修行しないことを遠離する。この意義によるので、この止と觀との二門は、共に相い助成して相い捨離しないのである。もし止と觀とを具備しなければ、菩提の道に入り得ることはない。

第四段 修行信心分

また次に、衆生が初めてこの法を学び正信を欲求するとき、その心が怯弱であって、この娑婆世界に住することで、自ら常に諸仏に値い親承し供養することができないのを畏れ、懼れて信心を成就し得ることは困難であると言ひ、意に退転しようとする者には、まさに如来に勝れた方便があり、信心を摂護したもうと知らねばならない。意を専らにして仏を念ずる因縁によって、願に従って他方仏土に生ずることを得て、常に仏を見て永く悪道を離れることを言う。スートラに「もし人が、専ら西方極樂世界の阿弥陀仏を念じ、修する所の善根を廻向し、彼の

世界に生まれようと願求すれば、往生することを得る」と説く通りである。常に仏を見るので終に退転することは全くない。もし彼の仏の真如法身を観じて、常に勤めて修習すれば、終には彼の土に生じ得て正定に住するからである。

第五段 勸修利益分

すでに「修行信心分」を説いたので、次に「勸修利益分」を説こう。

この様なマハーヤーナは諸仏の秘蔵である。私はすでに総じて説いた。もし衆生があつて、如来の甚深の境界において正信を生ずることを得て、誹謗を遠離し、大乘道に入ろうと欲するならば、まさにこの論を持し、思量修習するがよい。究竟して無上の道に至ることができるはずである。もし人が、この法を聞き已って怯弱を生じないならば、まさに、この人は必ずや仏道を継承し、必ず諸仏によって授記されるであろうと知らねばならない。たとえ、人があつて三千大千世界の中に満つる衆生を教化して、十善を行ぜさせ得たとしても、人が一食の頃においてこの法を正思するのには及ばず、前の功德に過ぎることは、喩にもならない。また次に、もし人が、この論を受持して観察修行すること、もしくは一日一夜であろうに、所有の功德は無量無辺にして、説くことを得るはずもない。たとえ、十方一切の諸仏が、各々無量無辺阿僧祇劫においてその功德を讃歎するとも、また尽くすことはできない。なぜであろうか。所謂、法性の功德は尽くすることは全くなく、この人の功德もまたまたこの様に、辺際は全くないからである。

その衆生があつてこの論の中において毀謗して信じないならば、獲る所の罪報は、無量劫を経て大苦惱を受けるであろう。したがって、衆生はただまさに仰いで信ぜねばならない。まさに誹謗してなはならぬ。深く自ら害し、また他人を害して、一切の三宝の種を断絶するからである。一切の如来はみなこの法によって、涅槃を得たことによるからである。一切の菩薩もこれによって修行し、仏智に入ることを得るからである。

まさに、過去の菩薩はすでにこの法によって、浄信を成ずることを得ていると知らねばならない。現在の菩薩も今この法によって、浄信を成ずることを得る。未来の菩薩もまさにこの法によって、浄信を成ずることを得るはずである。したがって衆生はまさに勤めて修学しなければならぬ。

諸仏の甚深にして広大なる義を 我れ今分に随つて総持して説きたり。
此の功德の法性の如くなるを廻らして 普く一切の衆生界を利せん。